

死後の恋

夢野久作



ハハハハハ。イヤ……失礼しました。嘸かしビックリなすつたでしよう。ハハア。乞食かとお思いになつた……アハアハアハ。イヤ大笑いです。

あなたは近頃、この浦塩うらじおの町で評判になつている、風来坊のキチガイ紳士が、私だという事をチツトモ御存じなかつたのですね。ハハア。ナルホド。それじゃそうお思いになるのも無理はありません。泥棒市に売れ残つていた旧式のボロ礼服を着ている男が、貴下あなたのような立派な日本の軍人さんを、スウエツランスカヤ（浦塩の銀座通り）のまん中で捕まえて、こんなレストランへ引っぱり込んで、ダシヌケに、

「私の運命を決定きめして下さい」

などと、お願いするのですからね。キチガイだと思われても仕方ありませんね。ハハハハハ……しかし私が乞食やキチガイでないことはおわかりになるでしょう。ネエ。おわかりになるでしょう。酔っ払いでないことも……さよう……。

お笑いになると困りますが、私はこう見えても生はえ抜きのモスコイ育ちで、旧露ロシアの貴族の血を享うけている人間なのです。そうして現在では、ロマノフ王家の末路に関する「死後の恋」という極めて不可思議な神秘作用に自分の運命を押えつけられて、夜よもオチオチ眠られぬくらい悩まされ続けておりますので……実は只今からそのお話をきいて頂いて、あなたの御判断を願おうと思つているのですが……勿論それは極めて真剣な、且つ歴史的に重大なお話なのですが……。

……ああ……御承知下さる……有り難う有り難う。ホントウに感謝します。……とここでウオツカを一杯いかがですか……ではウイスキーは……コニヤックも……皆お嫌い……日本の兵士はナゼそんなに、お酒を召し上らないのでしよう……では紅茶。コンフエートム 乾菓子。野菜……アツ。この店には自慢の腸詰ソーセージがありますよ。召し上りますか……ハラシヨ……。

オイオイ別嬪べっぴんさん。一寸来てくれ。注文があるんだ。……私は失礼してお酒をいただきます。……イヤ……全く、こんな贅沢な真似が出来るのも、日本軍が居て秩序を保つて下さるお蔭です。室へやが小さいのでペーチカがよく利きますね……サ……帽子をお取り下さい。どうか御ゆつくり願います。

へいたん 実を申しますと私はツイ一週間ばかり前に、あの日本軍の兵站部の門前で、あなたをお見かけした時から、ゼヒトモ一

度ゆつくりとお話ししたいと思っております。あなたがあの兵站部の門を出て、このスウェツランスカヤへ買い物にお出でになるお姿を拝見するたんびに、これはきつと日本でも身分のあるお方が、軍人になつておられるのだな……と直感しましたのです。イヤイヤ決してオベツカを云うのはありませぬ……のみならず、失礼とは思いましたが、その後だんだんと気をつけておりますと、あなた貴下の露西亞語が外国人とは思われぬ位お上手なことと、ロシア露西亞人に対して特別に御親切なことがわかりましたので……しかもそれは、あなた貴下がわたくしたち吾々同胞の気風きもちに対して特別に深い、行き届いた理解力を持つておいでになるのに原因していることが、ハッキリと私に首肯うなずされましたので、是非ともこの話を聞いて頂く事に決心してしまつたのです。否、あなたよりほかにこのお話を理解して、

私の運命を決定して下さいるお方は無いと思い込んでしまったのです。

さよう……只きいて下されば、いいのです。そうして私がこれからお話しする恐しい「死後の恋」というものが、実際にあり得ることを認めて下されば宜しいのです。そうすればそのお礼として、失礼で御座いますが、私の全財産を捧げさせて頂きたいと考えておるのです。それは大抵の貴族が眼を眩まわすくらいのお金に価値するもので、私の生命にも換えられぬ貴重品なのですが、このお話の真实性を認めて、私の運命を決定して下さいるお礼のためには、決して多過ぎると思いません。惜しいとも思いません。それほど私を支配している「死後の恋」の運命は崇高と、深刻と、奇怪とを極めているのです。

少々前置が長くなりますが、注文が参ります間、御辛棒下ごしんぼうさいませんか……ハラシヨ……。

私がこの話をして聞かせた人はかなりの多数に上っており
ます。同胞の露西亞ロシア人には無論のこと、チエツクにも、猶太ユダヤ
人にも、支那人にも、米国人にも……けれども一人として信
じてくれるものがないのです。そればかりか、私が、あま
り熱心になつて、相手構わずにこの話をして聞かせるために、
だんだんと評判が高くなつて来ました。しまいには戦争が生
んだ一種の精神病患者と認められて、白軍はくぐんの隊から逐おい出さ
れてしまつたのです。

そこでいよいよ私は、この浦塩うらしおの名物男となつてしまいま
した。この話をしようとする、みんなゲラゲラ笑つて逃げ
て行くのです。稀たまに聞いてくれる者があつても、人を馬鹿に

するなと云つて憤り出したたり……ニヤニヤ冷笑しながら手を振つて立ち去つたり……胸が悪くなつたと云つて、私の足下に唾を吐いて行つたり……それが私にとつて死ぬ程悲しいのです。淋さびしくて情なくて堪らないのです。

ですから誰でもいい……この広い世界中にタツタ一人でないから、現在私を支配している世にも不可思議な「死後の恋」の話を肯定して下さいるお方があつたら、……そうして、私の運命を決定して下さいるお方があつたら、その方に私の全財産である「死後の恋」の遺品かたみをソックリそのままお譲りして、自分はお酒を飲んで飲んで飲み死にしようと思つたのです。そうして、やつとのこと貴下あなたを発見みけたのです。あなたこそ、「死後の恋」に絡まる私の運命を、決定して下さいるお方に違いないと信じたのです。

や……お料理が来ました。あなたの御健康と幸福を祝さして下さい。日本の紳士にこのお話をするのは、貴下が最初なのですからネ……そうして恐らく最後と思いますから……。

二

ところで一体、あなたはこの私を何歳ぐらいの人間とお思いになりますか、エ？ わからない？……ハハハハ。これでもまだ二十四なのですよ。名前はワーシカ・コルニコフと申します。さよう、コルニコフというのが本名です……モスコウの大学に這入^{はい}つて、心理学を専攻して、やつと一昨年出て来たばかりの小僧ツ子ですがね。四十位には見えますでしょう。髪の毛^{かみのけ}や髯^{ひげ}に白髪^{しろが}が交っていますからね。ハハハハハ。しかし

私は、今から三ヶ月前迄は間違ひなく二十代に見えたのです。白髪などは一本も無くて、今とは正反対のムクムク肥った黒い顔に、白軍の兵卒の服を着ていたのですから……。

ところが、それがたった一夜の間に、こんな老人としよりになつてしまつたのです。

詳しく申しますと、今年（大正七年）の、八月二十八日の午後九時から、翌日の午前五時までの間のこと、……距離で云えば、ドウスゴイ附近の原ツパの真中に在る一ツの森から、南へ僅わずか十二露里ろり（約三里）の所に在る日本軍の前哨ぜんしやうまで、鉄道線路伝いによろめいて来る間のことです。そのあいだに今申しました……不可思議な「死後の恋」の神秘力は、私を魂のドン底まで苦しめてこんな老人としよりにまで衰弱せうじやくさせてしまいました……どうです。このような事実を貴下あなたは信じて

下さいますか。……ハラシヨ……あり得ると思われる……と仰おつしや言るのですね。オツチエニエ、ハラシヨ……有り難い有り難い。

ところで最前も一寸申ちよつとしました通り、私はモスコイ生まれの貴族の一人息子で、革命の時に両親を喪うしないましてから後のち、この浦塩へ参りますまでは、故意わざと本名を匿かくしておったのですが、あまり威張れませんが生れ付き乱暴なことが嫌いで、むしろ戦争などは身ぶるいが出る程好かなかつたのです。然しかし今申しましたペトログラードの革命で、家族や家産を一時に奪われて極端な窮迫に陥つてしまいますと、不思議にも気が変つて参りました、どうでもなれ……というような自殺気分を取り交まぜた自暴自棄の考えから、一番嫌いな兵隊になつたのですが、それから後幸のちか不幸か、一度も戦争らしい戦争に

ぶつからないまま、あちらこちらと隊籍をかえておりますうちに、セミヨノフ將軍の配下について、赤軍のあとを逐せきぐんいつつ、御承知でも御座いましょうがここから三百露里ばかり距へだたった、烏首里ウスリという村へ移動して参りましたのが、ちょうど今年の八月の初旬の事でした。そうしてそこで部隊の編成がかわった時に、このお話の主人公になっているリヤトニコフという兵卒が私と同じ分隊に這入ることになったのです。

リヤトニコフは私と同じモスコー生れだと云っておりますが、起居動作が思い切つて無邪気で活潑な、一種の躁はしやぎ屋と見えるうちに、どことなく気品が備わっているように思われる十七、八歳の少年兵士で、真黒く日に焼けてはいましたけれども、たしかに貴族の血を享うけていることが、その清らかな眼鼻立ちを見ただけでもわかるのでした。

彼はこの村に来て、私と同じ分隊に編入されると間もなく、私と非常な仲良しになつてしまつて、兄弟同様に親切にし合うのでした。……といつても決して忌^{いま}わしい関係などを結んだのではありませぬ。あんな事は獸性と人間性の矛盾を錯覚した、一種の痴呆患者のする事です……で……そのリヤトニコフと私とは、何ということなしに心を惹^ひかれ合つて隙^{ひま}さえあれば宗教や、政治や芸術の話などをし合つていたのでしたが、二人とも純な王朝文化の愛惜者であることが追々^{おいおい}とわかつて来ましたので、涙が出るほど話がよく合いました。殺風景な軍陣の間に、これ程の話相手を見つけた私の喜びと感激……それは恐らく、リヤトニコフも同様であつたらうと思われませんが……その楽しみが、どんなに深かつたかは、あなたのお察しに任せます。

けれども、そうした私たちの楽しみは、あまり長く続きませんでした。その後間もなくセミヨノフ軍の方では、この村に白軍が移動して来たことを、ニコリスクの日本軍に知らせるために、私達の一分隊……下士一名、兵卒十一名に、二人の将校と、一人の下士を添えて斥候せつこうに出すことになりましたのです。さよう、……連絡斥候ですね。実は私は、それまで弱虫と見られていて、そんな任務の時にはいつでも後廻しにされていたので、今度も都合よく司令部の勤務に廻わされていましたから、占しめたと思つて内心喜んでいたのですが、思いもかけぬ因縁に引かされて、自分から進んで行くようなことになりましたので……というのは、こんな訳です。

その出発にきまつた前日の夕方に……それは何日であつたか忘れてしまいましたが、私がリヤトニコフや仲間の分隊の

者に「お別れ」を云いに司令部から帰つて来ますと、分隊の連中はどこかへ飲みに行つてゐるらしく室へやの中には誰も居ません。ただ隅すみツこの暗い処ところにリヤトニコフがたつた一人でションボリと、革具かわぐの手入れか何かをしていましたが、私を見ると急に立ち上つて、何やら意味ありげに眼くばせをしながら外へ引っぱり出しました。その態度がどうも変テコで、顔色さえも尋常でないようです。そうして私を人の居ない廢うみやの横に連れ込んで、今一度そこいらに人影の無いのを見澄ましてから、内ポケットに手を入れて、手紙の束かと思われる扁平ひらべつたい新聞包みを引き出しますと、中から古ぼけた革のサックを取り出して、黄金色きんいろの止め金をパチンと開きました。見るとその中から、大小二、三十粒の見事な宝石が、キラキラと輝やき出しているではありませんか。

私は眼が眩くらみそうになりました。私の家は貴族の癖として、先祖代々からの宝石好きで、私も先天的に宝石に対する趣味を持つておりましたので、すぐにもう、焼き付くような気もちになつて、その宝石を一粒宛ずつつまみ上げて、青白い夕あかりの中に、ためつすがめつして検あらためたのですが、それは磨き方こそ旧式でしたけれども、一粒残らず間違よいのないダイヤ、ルビー、サファイヤ、トパーズなどの選より抜きで、ウラル産の第二流品などは一粒も交っていないばかりでなく、名高い宝石蒐集家の秘蔵の逸品ばかりを一粒ずつ貫しゅうしゅうかい集めたかと思われるほどの素晴らしいもの揃ぞろいだつたのです。こんなものが、まだうら若い一兵卒のポケットに隠れていようなぞと、誰が想像し得ましよう。

私は頭がシインとなるほどの打撃を受けてしまいました。そうして開いた口がふさがらないまま、リヤトニコフの顔と、宝石の群れとを見比べておりますと、リヤトニコフは、その、いつになく青白い頬を心持ち赤くしながら、何か云い訳でもするような口調で、こんな説明をしてきかせました。

「これは今まで誰にも見せたことのない、僕の両親の形見なんです。過激派の主義から見ればコンナものは、まるで麦の中の泥粒どろつぶと同様なものかも知れませんが……ペトログラードでは、ダイヤや真珠が溝泥どぶどろの中に棄ててあるというこゝとですけれども……僕にとつては生命いのちにも換えられない大切なものなのです。……僕の両親は革命の起る三箇月前……去

年の暮のクリスマス晩に、これを僕に呉れたのですが、その時に、こんな事を云つて聞かせられたのです。

……この露西亞ロシアには近いうちに革命が起つて、私たちの運命を葬ほうむるようなことに成るかも知れぬ。だからこの家の血統を絶やさない、万一の用心のために、誰でも意外に思うであろうお前にこの宝石を譲つてコッソリとこの家から逐おい出して終しまうのだ。お前はもしかすると、そんな処置を取る私たちの無慈悲さを怨うらむかもしれないけれども、よく考えてみると私たちの前途と、お前の行く末とは、どちらが幸福かわからないのだ。お前は活潑な生れ付きで、氣象きしやうもすっかりしているから、きつと、あらゆる艱難かんなん辛苦しんくに堪えて、身分を隠しおおせるだろうと思う。そうして今一度私たちの時代が帰つて来るのを待つことが出来るであろうと

思う。

……しかし、もしその時代が、なかなか来そうになかったならば、お前はその宝石の一部を結婚の費用にして、家の血統を絶やさぬようにして、時節を見ているがよい。そうして世の中が旧もとにかえったならば、残っている宝石でお前の身分を証明して、この家を再興するがよい……。

……と云うのです。僕はそれから、すぐに貧乏な大学生の姿に変装をして、モスコーへ来て、小さな家を借りて音楽の先生を始めました。僕は死ぬ程音楽が好きだったのでからね。そうして機お会りを見て伯林ベルリンか巴里パリへ出て、どこかの寄席か劇場の楽手になり了おせる計画だったのでありますが……しかしその計画はスツカリ失敗に帰して終しまったのです。その頃のモスコーはとても音楽どころか、明けても暮れてもピストルと爆

弾の即興交響楽で、楽譜なぞを相手にする人は一人もありません。おまけに僕は間もなく勃興ぼつこうした赤軍の強制募集に引つかかかって無理やりに鉄砲を担がせられることになったのです。

……僕が音楽を思い切ってしまったのはそれからの事でした。何故なぜ思い切ったかかっていうと、僕の習っていた楽譜はみんなクラシカルな王朝文化式のものばかりで、今の民衆の下等な趣味には全く合いません。そればかりでなく、ウツカリ赤軍の中で、そんなものをやっていると身分が曝ばれる虞おそれがありますからね。……ですから一生懸命に隙を見つけて、白軍の方へ逃げ込んで来たのですが、それでもどこに赤軍の間諜かんちようが居るかわかりませんからスツカリ要心をして、口笛や鼻唄にも出しませんでしたが、その苦しさといったらありませんでした。上手なバラライカや胡弓の音ねを聞きたんびに耳を押

えてウンウン云っていたのですが……そうして一日も早く両親の処へ帰りたい……上等のグラランドピアノを思い切つて弾いてみたいと、そればかり考え続けていたのですが……。

……ところが、ちょうど昨夜のことです。分隊の仲間がいつになくまじめになつて、何かヒソヒソと話をし合っているようですから、何事かと思つて、耳を引つ立ててみますと、それは僕の両親や同胞きょうだいたちが、過激派のために銃殺されたという噂うわさだったのです。……僕はビツクリして声を立てるところでした。けれども、ここが肝腎かんじんのところだと思ひましたから、わざと暗い処に引つ込んで、よくよく様子を聞いてみますと、僕の両親が、何も云わずに、落ち付いて殺された事や、僕を一番好すいていた弟が銃口の前で僕の名を呼んで、救いを求めたことまでわかつていて、どうしても、ほんとうとしか

思えないのです。……ですから、僕はもう……何の望みも無くなつて……あなたにお話ししようと思つても、生憎勤務に行つて……いらつしやらないし……」

と云ううちに涙を一パイに溜めてサツクの蓋ふたを閉じながら、うなだれてしまつたのです。

私は面喰めんくらつたが上にも面喰らわされてしまいました。腕を組んだまま突立つて、リヤトニコフの帽子の眉庇まびさしを凝視してゐるうちに、膝頭ひざがしらがブルブルとふるえ出すくらい、驚き惑まどつておりました。……私はリヤトニコフが貴族の出であることを前からチャンと察しているにはいましたが、まさかに、それ程の身分であろうとは夢にも想像していませんでした。実を云うと私は、その前日の勤務中に司令部で、同じような噂をチラリと聞いておりました。……ニコラス廃帝が、そ

の皇后や、皇太子や、内親王たちと一緒に過激派軍の手で銃殺された……ロマノフ王家の血統はとうとう、こうして凄惨な終結を告げた……という報道があつたことを逸早く耳いちはやにしているにはいたのですが、その時は、よもやソナ事がある筈はないと確信していました。いくら過激派でも、あの何も知らない、無力な、温順なツアールとその家族に対して、そんな非常識な事を仕掛ける筈はあり得ない……と心の中で冷笑うちしていたのです。又、白軍の司令部でも、私と同意見だつたと見えて、「今一度真偽をたしかめてから発表する。決して動揺してはならぬ」という通牒を各部隊に出すように手筈をうしていたのですが……。

とはいえ……仮りにそれが虚報であつたとしても、今のリヤトニコフの身の上話と、その噂とを結びつけて考えると、

私は実に、重大この上もない事実^{じじつ}に直面していることがわかるのです。そんな重大な因縁^{いんげん}を持った、素晴らしい宝石の所有者である青年と、こうして向い合つて立っている——ということは真に身の毛も竦^{よだ}立つ危険千万な運命と、自分自身の運命とを結びつけようとしている事になるのです。

……但し、……ここに唯一つ疑わしい事実がありました。：

……というのは他でもありません。ニコラス廃帝が、内親王は^{いくたり}何人も持つておられたにも拘^{かか}わらず、皇子^{おうじ}としては今年やつと十五歳になられた皇太子アレキセイ殿下以外に一人も持つておられなかったことです。……ですからもし今日^{こんにち}只今、私の眼の前に立っている青年が、真に廃帝の皇子で、過激派の銃口を免れたロマノフ王家の最後の一人であるとすれば、オルガ、タチアナ、マリア、アナスタシヤと四人の内親王殿下の

中で、一番お若いアナスタシヤ殿下の兄君か弟君か……いずれにしても、そこいらに最も近い年頃に相当する訳なのですが……そうして、これがもしずっと以前の露西亞^{ロシア}か、又は外国の皇室ならば、すぐに、そんな秘密の皇子様が、人知れず民間に残っておられることを首肯されるのですが、……しかし最近の吾がロマノフ王家の宮廷内では、斯^か様な秘密の存在が絶対に許されない事情があつたのです。……すなわち、もしニコラス廢帝に、こんな皇子があつたとすれば、^{たとえ}仮令、どんなに困難な事情がありましたしようと、当然皇子として披露さるべき筈であることがその当時の国情から考えても、わかり切っているのです。その国情というのはあらかた御存じでもありましようし、この話の筋に必要でもありませんから略しますが、要するに、その当時のスラヴ民族は、上も下も

一斉に、皇儲こうちよの御誕生を渴望しておりましたので、甚しきに到つては、ビクトリア女皇の皇女おうじよである皇后陛下の周囲に、ドイツ独逸の賄賂まいないを受けている者が居る。……皇子がお生れになる都度に圧殺している者が居る……というような馬鹿げた流言まで行われていたことを、私は祖父から聞いて記憶していたのです。

……ですから……こうした理由から推して、考えてみますと、現在私の眼の前に宝石のケースを持ったままうなだれて、白いハンケチを顔に当てている青年は、必ずや廃帝に最も親ちかしい、何々大公の中の、或る一人の血を引いた人物に違いない……それは、斯様な「身分を証明するほどの宝石」の存在によつても容易に証明されるので、ことによるとこの青年は、その父の大公一家が、廃帝と同じ運命の途連みちづれにされたこと

を推測しているか……もしくは、その大公の家族の虐殺が、
廢帝の弑逆しいげやくと誤り伝えられている事を、直覚しているのかも
知れない……。しかも万一そうとすれば、そうした容易なら
ぬ身分の人から、かような秘密を打ち明けられるという事は、
スラヴの貴族としてこの上もない光栄であり、且つ面目めんぼくにも
なることであるが、同時に、他の一面から考えるところこれは又、
予測することの出来ない恐しい、危険千万な運命に、自分の
運命が接近しかけていることになる……。

……と……こう考えて来ました私は、吾れ知らずホーツと
大きな溜息をつきました。そうして腕を組み直しながら、今
一度よく考え直してみました。そのうちに私は又、とても
訝おかしい……噴飯ふきだしたいくらい変テコな事実が気が付いたので
す。

……というのは、この眼の前の青年……本名は何というのか、まだわかりませんが……リヤトニコフと名乗る青年が、この際ナゼこんなものを私に見せて、これ程の重大な秘密を打ち明ける気になったかという理由がサツパリわからない事です。もしかしたらこの青年は、私が貴族の出身であることのアラカタ察して……且つは親友として信頼し切っている余りに、胸に余った秘密の歎きと、苦しみとを訴えて、慰めてもらいに来たのではあるまいかとも考えてみました……。それにしても余りに大胆で、軽率^一で、それほどの運命を背負って立っている、頭のいい青年の所業^{しわざ}とはどうしても思われませぬ。

それならばこの青年は一種の誇大妄想狂みたような変態的性格の所有者ではないか知らん。たつた今見せられた^{おびただ}夥しい

宝石も、私の眼を欺くに足るほどの、巧妙を極めた贗造物にせものではなかつたかしらん。……なぞとも考えてみましたが、いくら考え直しても、今の宝石はそんな贗造物にせものではない。正真正銘の逸品揃いに違いないという確信が、いよいよ益々高まつて来るばかりです。

……しかし又、そうかといってこの青年に、

「何故なげその宝石を僕に見せたんですか」

なぞと質問をするのは、私に接近しかけている危険な運命の方へ、一步を踏み出すことになりそうな予感がします。

……で……こうして色々と考えまわした揚げ句あ、結局するところ……いずれにしてもこの場合は何気なくアシラッて、どこまでも戦友同志の一兵卒になり切っていた方が、双方のためのちに安全であろう。これから後のちも、そうした態度でつき合つ

て行きながら、様子を見ているのが最も賢明な方針に違いな
いであろう……とこう思い当りますと、根が臆病者の私はす
ぐに腹をきめてしまいました。前後を一渡り見まわしてから、
如何にも貴族らしく、鷹揚おうようにうなずきながら二ツ三ツ咳せき払い
をしました。

「そんなものは無暗に他人ひとに見せるものではないよ。僕だか
らいいけれども、ほかの人間には絶対に気付かれないように
していないと、元も子もない眼に会わされるかも知れないよ。
しかし君の一身上に就いては、将来共に及ばずながら力になつ
て上げるから、あまり力を落さない方がいいだろう。そんな
身分のある人々の虐殺や処刑に関する風説は大抵二、三度宛
伝わっているのだからね。たとえばアレキサンドロウイチ、
ミハイル、ゲオルグ、ウラジミルなぞという名前はネ」

と云い云い相手の顔色を窺^{うかが}つておりましたが、リヤトニコフの表情には何等の変調もあらわれませんでした。却^{かえ}つてそんな名前をきくと安心したように、長い溜め息をしいしい顔を上げて涙を拭きますと、何かしら嬉しそうにうなずきながら、その宝石のサックを、又も内ポケットの底深く押し込みました。

……が……しかし……。私は決して、作り飾りを申しません。あなたに蔑^{さげ}すまれるかも知れませんが……こんなお話に嘘を交ぜると、何もかもわからなくなりますから正直に告白しますが……。

手早く申しますと私は、事情の奈何^{いかん}に拘わらず、その宝石が欲しくてたまらなくなつたのです。私の血管の中に、先祖代々から流れ伝わっている宝石愛好慾が、リヤトニコフの宝

石を見た瞬間から、見る見る松明たいまつのように燃え上つて来るのを、私はどうしても打ち消すことが出来なくなつたのです。そうして「もしかすると今度の斥候せつこう旅行で、リヤトニコフが戦死はしまいか」というような、頼りない予感から、是非とも一緒に出かけようという気持ちになつてしまつたのです。うっかりすると自分の生命いのちが危いことも忘れてしまつて……。しかも、その宝石が、間もなく私を身の毛も竦立よだつ地獄に連れて行こうとは……。そうしてリヤトニコフの死後の恋を物語ろうとは、誰が思い及びましょう。

四

私共の居た烏首里ウスリからニコリスクまでは、鉄道で行けば半

日位しかかからないのでした。途中の駅や村を赤軍が占領している。ズット東の方に迂廻して行かなければなりません。それは私共の一隊にとっては実に刻一刻と生命を切り縮められるほどの苦心と労力を要する旅行でしたけれども、幸いに一度も赤軍に発見されないで、出発してから十四日目の正午頃に、やっとドウスゴイの寺院の尖塔せんとうが見える処まで来ました。

そこは赤軍が占領しているクライフスキーから南へ約八露里ばうばう（二里）ばかり隔った処で、涯はてしもない湿地の上に波打つく光りながら横たわっております。その手前の一露里ばかりと思われる向うには、コンモリとしたまん丸い潤葉樹かつようじゆの森林が、ちようどクライフスキーの町の離れ島のようになつて、

草原くさはらのまん中に浮き出しておりました。この辺の森林という森林は大抵鉄道用に伐きつてしまつてあるのに、この森だけが取り残されているのは不思議といえは不思議でしたが……その森のまん丸く重なり合つた枝々の茂みが、草原の向うの青い青い空の下で、真夏の日光をキラキラと反射しているのが、何の事はない名画でも見るように美しく見えました。

ここまで来るともうニコリスクが鼻の先といつてよかつたので、私共の一隊はスツカリ気が弛ゆるんでしまいました。将校を初め兵士達も皆、腰の処まである草の中から首を擡もたげて、やつと腰を伸ばしながら提げていた銃を肩に担ぎました。そうして大きな雑草の株を飛び渡り飛び渡りしつつ、不規則な散開隊形を執とつて森の方へ行くのでしたが、間もなく私たちがのうしろの方から、涼しい風がスースーと吹きはじめまして、

何だか遠足でもしているような、悠々とした気もちになつてしまいました。先頭の将校のすぐうしろに跟ついてゐるリヤトニコフが帽子を横ツチョに冠かぶりながら、ニコニコと私をふり返つて行く赤い頬や、白い歯が、今でも私の眼の底にチラ付いております。

その時です。多分一露里半ばかり距たつてゐる鉄道線路の向う側だつたらうと思ひますが、不意にケタタマシイ機関銃の音が起つて、私たちの一隊の前後の青草の葉を虚空こくうに吹き散らしました。そうしてアツと驚く間もなく、その中うちの一発が私の左の股ももを突切つて行つたのです。

私は一尺ばかり飛び上つたと思うと、横たおしに草の中へたおれ込みました。けれども、それと同時に「傷は股ももだ。生命いのちに別状は無い」と気が付きましたので、草の中に尻餅しりもちを突い

たままワナワナとふるえる手で剣を抜いてズボンを切り開くと、表皮と肉を抉り取られた傷口へシツカリと繃帯をしました。そのうちにも引き続いて発射される機関銃の弾丸は、ピピピピと小鳥の群れのように頭の上を掠めて行きますので、私は一と縮みになって身を伏せながら、仲間の者がどうしているかと、草の間から見まわしました。こんな処で一人ポツチになるのは死ぬより恐い事なのですからね。

しかし私の仲間の者は、一人も私が負傷した事に気づかないらしく、皆銃を提げて、草の中をこけつまろびつしながら向うのまん丸い森の方へ逃げて行くのでした。今から考えると余程狼狽していたらしいのですが、そのうちに、どうしたわけか機関銃の音が、パツタリと止んでしまいましたけれども、私の戦友たちは、なおも逃げるのを止めません。やがて、その

影がだんだんと小さくなつて、森に近づいたと思うと、先登^{せんとう}に二人の将校、そのあとから十一名の下士卒が皆無事に森の中へ逃げ込みました。その最後に、かなり逃げ後れた^{おく}リヤトニコフが、私の方をふり返りふり返り森の根方を這い上つて^{のぼ}行くのがよく見えました。が、ウツカリ合図をして撃たれでもしては大変と思いましたが、なおも身を屈^{かが}めて、足の痛みを我慢しながら、一心に森の方を見守つて、形勢がどうなつて行くかと心配しておりました。

すると又、リヤトニコフの姿が森の中へ消え入つてから十秒も経たないうちに……どうでしょう。その森の中で突然に息苦しいほど激烈な銃声が上がつたのです。それは全くの乱射乱撃で、呆^{あき}れて見ている私の頭の中をメチャメチャに掻^かきみだすかのように、跳弾があとからあとから恐ろしい悲鳴をあ

げつつ森の外へ八方に飛び出しているようでしたが、それが又、一分間も経たないうちにピツタリと静まると、あとは又もとの通り、青々と晴れ渡った、絵のようにシインとした原ツパに帰ってしまいました。

私は何だか夢を見ているような気もちになりました。一体何事が起つたのだらうと、なおも一心に森の方を見つめておりましたが、いつまで経つても、森を出て行く人影らしいものは見えず、銃声に驚いたかして、原ツパを渡る鳥の姿さえ見つかりません。

私はそんな光景を見まわしているうちに、何故ということなしに、その森林が、たまらない程恐しいものに思われて来ました。……今聞こえた銃声が敵のか味方のか……というような常識的な頭の働らきよりも、はるかに超越した恐怖心、……

私の持つて生れた臆病さから来たらしい戦慄せんりつが、私の全身を這いまわりはじめたのを、どうすることも出来ませんでした。……一面にピカピカと光る青空の下で、緑色にまん丸く輝く森林……その中で突然に起つて、又突然に消え失せた夥おびただしい銃声、……そのあとの死んだような静寂……そんな光景を見つめているうちに、私は歯の根がカチカチと鳴りはじめました。草の株を掴つかんでいる両方の手首が氷のように感じられて来ました。眼が痛くなるほど凝視している森の周囲の青空に、灰色の更紗さらさ模様みたようなものがチラチラとし始めたと思うと、私は気が遠くなつて草の中に倒れてしまいました。もしかするとそれは股ももの出血が非道ひどかつたせいかも知れませんが、それでしたけど……。

それでも、やや暫くしてから正気を回復しますと、私は銃

も帽子も打ち棄てたまま、草の中を這いずり始めました。草の根方に引つかかるたんびに、眼も眩くらむほどズキズキと高潮する股の痛みを、一生懸命に我慢しいしい森の方へ近づいて行きました。

何故その時に、森の方へ近づいて行つたのか、その時の私には全くわかりませんでした。生れつき臆病者の私が、しかも日の暮れかかっている敵地の野原を、堪え難い痛みあえに喘あえぎながら、どうしてそんな気味のわるい森の方へ匍はい寄つて行く気持ちになつたのか……。

……それは、その時既に私が、眼に見えぬ或る力で支配されていたというよりほかに説明の仕方がありませんでしょう。常識からいえば、そんな気味のわるい森の方へ行かず、草の中で日の暮れるのを待つて、鉄道線路に出て、闇に紛れて

ニコリスクの方へ行くのが一番安全な訳ですからね。申すまでもなくリヤトニコフの宝石の事などは、恐ろしい出来事の連続と、^{はげ}烈しい傷の痛みのために全く忘れておりましたし、好奇心とか、戦友の生死を見届けるとかいうような有りふれた人情も、毛頭残っていません。……唯……自分
の行く処はあの森の中にしかないというような気持ちで……
そうして、あそこへ着いたら、すぐに何者にか殺されて、この恐しさと、苦しきから救われて、あの一番高い木の梢こずえから、
真直ぐに、天国へ昇ることが出来るかもしれぬ……というよ
うな、一種の甘い哀愁を帯びた超自然的な考えばかりを、た
まらない苦痛の切れ目切れ目に往来させながら、……はてし
もなく静かな野原の草イキレに噎むせかえりながら……何とは
なしに流るる涙を、泥だらけの手で押しぬぐい押しぬぐい、

一心に左足を引きずっていたようです。……ただし……但……その途中で二発ばかり、軽い、遠い銃声らしいものが森の方向から聞こえましたから、私は思わず頭を擡もたげて、恐る恐る見まわしましたが、やはり四方あたりには何の物影も動かず、それが本当の銃声であつたかどうかすら、考えているうちにわからなくなりましたので、私は又も草の中に頭を突込んで、ソロソロと匍もいずり始めたのでした。

五

森の入口の柔らかい芝草の上に私が匍もい上つた時には、もうすつかり日が暮れて、大空が星だらけになつておりました。泥まみれになつた袖口そでぐちや、ビショビショに濡れた膝頭ひざがしらや、お

尻のあたりからは、冷気がゾクゾクとしみ渡って来て、鼻汁と涙が止め度なく出て、どうかすると嚏くしゃみが飛び出しそうになるのです。それを我慢しいしい草の上に身を伏せながら、耳と眼をジツと澄まして動静ようすをうかがいますと、この森は内部の方までかなり大きな樹が立ち並んでいるらしく、星明りに向うの方が透いて見えるようです。しかも、いくら眼を睜みはり、耳を澄しても人間の声は愚か、鳥の羽ばたき一ツ、木の葉の摺すれ合う音すらきこえぬ静けさなのです。

人間の心というものは不思議なものですね。こうしてこの森の中には敵も味方も居ない……全くの空虚であることが次第にわかって来ると、何がなしにホツとすると同時に、私の平生へいぜいの気弱さが一時に復活して来ました。こんな気味のわるい、妖怪おぼけでも出て来そうな森の中へ、たった一人で、どうして

来たのかしらん……と気が付くと、思わずゾツとして首をちぢめました。軍人らしくもない性格でありながら軍人になって、こんな原ツパのまん中に遙はる遙ばるとやって来て、たった一人で傷つきたおれている自分の運命までもが、今更にシミジミとふり返られて、恐ろしくて堪らなくなりましたので、すぐにも森を出ようと思いました。又思い返してジツと森の中の暗やみを凝視しました。

私がリヤトニコフの宝石の事を思い出したのは、実にその時でした。リヤトニコフは……否、私たちの一隊は、もしかするとこの森の中で殺されているかも知れぬ……と気が付いたのもそれと殆んど同時でした。

……早くから私たちの旅行を発見していた赤軍は、一人も撃ち洩らさない計略を立てて、あの森に先廻りをしていた。

そうして私たちをあの森に追い込むべく、不意に横合いから機関銃の射撃をしたものと考えれば、今までの不思議がスツカリ解決される。しかも、もしそうすれば私たちの一隊は、この森の中で待ち伏せしていた赤軍のために全滅させられている筈で、リヤトニコフも無論助かっている筈はない。赤軍はそのあとで、私が気絶しているうちに線路へ出て引き上げたのであろう……と、そう考えているうちに私の眼の前の闇の中へ、あのリヤトニコフの宝石の幻影がズラリと美しく輝やきあらわれました。

私は今一度、念のために誓います。私は決して作り飾りを申しませぬ。この時の私はもうスツカリ慾望の奴隷になつてしまつていたのです。あの素晴らしい宝石の数十粒がもしかすると自分のものになるかも知れぬ、という世にも浅ましい望

み一つのために、苦痛と疲労とでへトへトになつてゐる身体からだを草の中から引き起して、インキ壺の底のように青黒い眼の前の暗やみの中にソロソロと這い込みはじめたのです。……戦場泥棒……そうです。この時の私の心理状態を、あの人非人ではかあり得ない戦場泥棒の根性と同じものに見られても、私は一言の不服も申し立て得ないでしょう。

それからすこし森の奥の方へ進み入いりますと、芝草が無くなつて、枯れ葉と、枯れ枝ばかりの平地になりました。それにつれて身体中からだの毛穴から沁しみ入るような冷たさ、気味わるさが一層深まつて来るようで、その枯れ葉や枯れ枝が、私の掌てのひらや膝の下で碎ける、ごく小さな物音まで、一ツ一ツに私の神経をヒヤヒヤさせるのでした。

そのうちに、だんだんと奥へ這入るにつれて、恐怖に慣れ

たせいか、いろんな事がハッキリとわかつて来ました。……この森には昔、とりで砦か、お寺か、何かがあったらしく、ところどころ処々に四角い、大きな切石が横たわっていること。時々人が来るらしく、落ち葉を踏み固めたところが連続していること。そうして今は全く人間が居ないので、今まで来る間に死骸らしいものには一つも行き当らず、小銃のケースや帽子なぞいう戦鬪の遺留品にも触れなかったことから推測すると、味方の者は無事にこの森を出たかも知れない……ということなぞ。……そのうちに、積り積った枯れ葉の山が、匍つている私の掌てのひらに生なまあたたかく感ぜられるようになりました時、私はちようど森のまん中あたりに在る、すこしばかりの凹地に来たことを知りました。そこから四辺あたりを見まわしますと、森の下枝ごしに四辺の原ツパが薄明るく見えるのです。

私は安心したような……同時にスツカリ失望したような、何ともしれぬ深いため息をして、その凹地のまん中に坐りこみました。思い切つて大きな嚏を一つしながら頭の上をふりあおぐと、高い高い木の梢の間から、微かな星の光りが二ツ三ツ落ちて来ます。それを見上げているうちに、私はだんだんと大胆になつて来たらしく、やがて、いつもポケットに入れているガソリンマッチの事を思い出しました。

私はその凹地のまん中でいく度もいく度も身を伏せて四方のどこからも見えないことを、たしかめますと、すぐに右のポケットからガソリンマッチを取り出して、手元を低くしながら、自動点火仕掛の蓋をパット開きました。その光りをたよりにソロソロと頭を擡げて、まず鼻の先に立っている、木の幹かと思われていた白いものをジツと見定めましたが、間

もなく声も立て得ずにガソリンマッチを取り落してしまいました。

けれどもガソリンマッチは地に落ちたまま消えませんでした。そこいらの枯れ葉と一緒にポツポツと燃えているうちにケースの中からガソリンが洩れ出したと見えて、見る見る大きく、ユラユラと油煙をあげて燃え立ち始めました。けれども私はそれを消すことも、どうすることも出来ずに、尻餅をついたまま、ガタガタと慄ふるえているばかりでした。

私の居る凹地を取り捲いた巨大な樹の幹に、一ツ宛丸裸ずつまるはだか体の人間の死骸が括くりつけてあるのです。しかも、よく見ると、それは皆最前まで生きていた私の戦友ばかりで、めいめいの襯衣シヤツか何かを引つ裂いて作つたらしい綱で、手足を別々に括つて、木の幹の向うへ、うしろ手に高く引っぱりつけてあるの

ですが、そのどれもこれもが銃弾で傷ついている上に、そうした姿勢で縛られたまま、あらゆる残虐な苦痛と侮辱とをあたえられたものらしく、眼を抉り取られたり、歯を砕かれたり、耳をブラリと引き千切られたり、股の間をメチャメチャに切りさいなまれたりしています。そんな傷口の一つ一つから、毛糸の束のような太い、または細長い血の紐を引き散らして、木の幹から根元までドロドロと流しかけたまま、グツタリとうなだれているのです。口を引き裂かれて馬鹿みたような表情にかわっているもの……鼻を切り開かれて笑っているようなもの……それ等がメラメラと燃え上る枯れ葉の光りの中で、同時にゆらゆらと上下に揺らめいて、今にも私の上に落ちかかって来そうな姿勢に見えます。

そんな光景を見まわしている間が何分間だったか、何十分

だったか、私は全く記憶しません。そうして胸を抉られた下士官の死骸を見つめている時には、自分の胸の処を、釦が千切れる程強く引つ搦んでいたようです。咽喉を切り開かれている将校を見た時には、血の出るのも気付かずに、自分の咽喉仏の上を掻き撈つていたようです。下脛を引き放されて笑っているような血みどろの顔を見あげた時には、思わず、ハッハッと喘ぐように笑いかけたように思います。

……現在の私が、もし人々の云う通りに精神病患者であるとするれば、その時から異常を呈したものに違いありません。

すると、そのうちに、こうして藻掻いている私のすぐ背後で、誰だかわかりませんが微かに、歎め息をしたような気が感ぜられました。それが果して生きた人間のため息だったかどうかわかりませんが、私は、何がなしにハッとして飛

び上るように背後うしろをふり向きますと、その一際ひときわ大きな樹の幹に、リヤトニコフの屍体が引つかかって、赤茶気あかちやけた枯れ葉の焔ほのおにユラユラと照らされているのです。

それはほかの屍体と違って、全身のどこにも銃弾のあとがなく、又虐殺された痕跡も見当りませんでした。唯その首の処をルパシカの白い紐で縛って、高い処に打ち込んだ銃剣に引っかけてあるだけでしたが、そのままにリヤトニコフは、左右の手足を正しくブラ下げて、両眼を大きく見開きながら、まともに私の顔を見下しているのです。

……その姿を見た時に私は、何だかわからない奇妙な叫び声をあげたように思います。……イヤイヤ。それは、その眼付が、怖ろしかったからではありません。

……リヤトニコフは女性だったのです。しかもその乳房は

処女の乳房だったのです。

……ああ……これが叫ばずにおられましようか。昏迷せずにおられましようか。……ロマンフ、ホルスタイン、ゴットルブ家の真個の末路……。

彼女……私は仮りにそう呼ばせて頂きます……彼女は、すこし後れて森に這入ったために生け捕りにされたものと見えます。そうして、その肉体は明らかに「強制的の結婚」によって蹂躪じゆうりんされていることが、その唇を隈取つている猿轡さるぐつわの癥痕あとでも察しられるのでした。のみならず、その両親の慈愛の賜たまものである結婚費用……三十幾粒の宝石は、赤軍がよく持つている口径の大きい猟銃を使つたらしく、空包に籠めて、その下腹部に撃ち込んであるのです。私が草原を匍はつて、そのうちに耳にした二発の銃声は、その音だったのでしよう……そこの

処の皮と肉が破れ開いて、内部なかから掌てのひらほどの青白い臓腑がダラリと垂れ下っているその表面に血にまみれたダイヤ、紅玉ルビー、青玉サファイヤ、黄玉トパーズの数々がキラキラと光りながら粘り付いておりました。

六

……お話というのはこれだけです。……「死後の恋」とはこの事をいうのです。

彼女は私を恋していたに違いありません。そうして私と結婚したい考えで、大切な宝石を見せたものに違いないのです。……それを私が気付かなかったのです。宝石を見た一刹那せつなから烈はげしい貪慾とらに囚とらわれていたために……ああ……愚か

な私……。

けれども彼女の私に対する愛情は変わりませんでした。そうして自分の死ぬる間際に残した一念をもつて、私をあゝ森まで招き寄せたのです。この宝石を私に与えるために……この宝石を霊媒として、私の魂と結び付きたいために……。

御覧なさい……この宝石を……。この黒いものは彼女の血と、弾薬の煤すすなのです。けれども、この中から光っているダイヤモンド特有の虹にじの色を御覧なさい。青玉サファイヤでも、紅玉ルビーでも、黄玉トパーズでも本物の、しかも上等品でなくてはこの硬度と光りはない筈です。これはみんな私が、彼女の臓腑の中から探り取ったものです。彼女の恋に対する私の確信が私を勇気づけて、そのような戦慄すべき仕事を敢あえてさしたのです。

……ところが……。

この街の人々はみんなこれを贖せ物だと云うのです。血は大方豚か犬の血だろうと云って笑うのです。私の話をまるつきり信じてくれないのです。そうして、彼女の「死後の恋」を冷笑するのです。

……けれどもあなた貴下は、そんな事はおっしゃ仰言らぬでしょう。……

ああ……本当にして下さる。信じて下さる、……ありがとうございます。ありがとうございます。サアお手を……握手をさして下さい……宇宙間に於ける最高の神秘「死後の恋」の存在はヤツパリ真実でした。私の信念は、あなたによって初めて裏書きされました。これでこそ乞食みたようになって、人々の冷笑を浴びつつ、この浦塩の町をさまよい歩いたかい甲斐がありました。

私の恋はもう、スツカリ満足してしまいました。

……ああ……こんな愉快なことはありません。済みませぬ

がもう一杯乾盃させて下さい。そうしてこの宝石をみんな貴下あなたに捧げさして下さい。私の恋を満足させて下さったお礼です。私は恋だけで沢山です。その宝石の霊媒作用は今日こんにち只今完全にその使命を果たしたのです……。サアどうぞお受け取り下さい。

……エ……何故ですか……。ナゼお受け取りにならないのですか……。

この宝石を捧げる私の気持ち、あなたには、おわかりにならないのですか。この宝石をあなたに捧げて……。喜んで、満足して、酒を飲んで飲んで飲み抜いて死にたがっている私を可愛相かわいそうとお思いにならないのですか……。

エツ……エエツ……私の話が本当らしくないって……。

……あ……貴下あなたもですか。……ああ……どうしよう……

ま……待って下さい。逃げないで……ま……まだお話するこ
とが……ま、待って下さいッ……。

ああッ……

アナスタシヤ内親王殿下……。

後註

- 一 「軽率」は底本では「軽卒」

死後の恋

底本：「夢野久作怪奇幻想傑作選 あやかしの鼓」角川ホラー文庫、角川書店
1998（平成 10）年 4 月 10 日初版発行

初出：「新青年」博文館
1928（昭和 3）年 10 月

入力：林裕司

校正：浜野 智

1998 年 11 月 10 日公開

2003 年 10 月 6 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。